慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	弁証法と観点との関係について
Sub Title	La dialectique et le point de vne
Author	水野, 道夫(Mizuno, Michio)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1971
Jtitle	哲學 No.58 (1971. 12) ,p.51- 65
JaLC DOI	
Abstract	La dialectique ne compte-t-elle pas parmi les essais si importants et si nombreux d'aujourd'hui pour atteindre la synthese valable dans differents domaines de sciences. Pour la delivrer du slowgan politique et examiner sincerement de la possibilite d'en faire la methode de la synthese, il faudra s'interroger sur deux ou trois points fondamentaux, parmi lesquels il s'agit surtout le point de vue de l'observateur qui fait partie du systeme observe. Avec le soulignement et l'elargissement de l'idee du point de vue de l'observateur apparait le Cogito en face du monde objectif, ce qui est essaye par Sartre dans son oeuvre "Critique de la raison dialectique". Peut-il arriver a etablir la raison dialectique entre l'etre et la connaissance dans le cadre de la dialectique marxiste? Ma reponse est non. Mais, examiner ce sujet propose par lui, en comparaison avec le point de vue dans l'auteur de "l'etre et le neant", ou il a ironiquement affirme la necessite de la confusion de la conscience avec la connaissance et du point de vue absolu pour permettre de synthetiser cette dualite et avec celui dans l'auteur de Capital, dans lequel Marx, situe d'une part dans le plus haut degre du development de l'histoire, voit le sens et la signification essentielles de certains categories et d'autre part vit la phenomene concrete, mais non essentielle au cours de l'histoire humaine et enfin synthetise cette dualite dans son propre point de vue, cela servira un peu d'eclaircir la relation entre les points de vue et la dialectique.
Notes	名誉教授宮崎友愛先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000058-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

弁証法と観点との関係について

水　野　道　夫

(1)

サルトルは《弁証法的理性批判》において，マルクス主義の内部で，存在と認識とを弁証法的に綜合する新しい理性の可能性をさぐっている．彼はマルクス主義の硬化の理論上の原因を，疑いの余地のないものとして先立って構成された認識が，世界や人間から断絶した形式的な体系となってしまう点に，つまり，問いかける者を排除し，問いかけられる者を絶対的な知の対象とするところに求めている．そこでサルトルは，この問いかけるものとしての存在の回復を主張し，コギトの反省を，量子力学における実験体系の一部を構成する実験者と同じように，世界に位置づけしようと試みる．反省の契機は実践であり，この実践は客観的なものから客観的なものへと移行する際に通る内面化である．ここでは，投企や乗り超えが，その具体的な例としてあげられる．コギトは，たしかに実践のうちに，実践は階級闘争のうちに各々契機づけられる．しかし階級闘争や更に資本主義の構成，及び歴史の意味は，少くとも枠としてはマルクスの概念をそのまま継いでいる．つまり，実存主義は，マルクス主義の内部で，その硬化症のおかげて生き続けることができる．彼がくり返しくり返し主張する全体化への試みは，彼の目ざしたヘーゲル的な意味においてではなく，むしろ，硬化した不連続化したこの主義の内部を，存在と認識を綜合する弁証法的理性によって蘇生させようとする試み，つまり全体化と呼ぶより連続化と呼ばれるにふさわしい試みになっているように思われる．というのは，全体化が全体を見通す観点に立ってはじめて可能であるならば，この観点こそ彼に欠けているからである．そしてこの観点こそ，実はマルクス

に階級闘争や歴史や資本主義等を弁証法的に把握させることを可能にしたのであった．このサルトルがそれ程問題にしていないように思われる弁証法もまた，果して，存在と認識とを綜合する弁証法なのだろうか．つまり問い問われるものという関係から，この概念が導かれたのだろうか．必ずしもそうではないように思われる．或いはそうだとしても，問い問われるものという最初の関係を既に全く失ってしまったものと考えられる．そこで，二種類の弁証法が，つまり，方法として常にコギトによって検討される弁証法と観点をカッコに入れて成り立つ真理の構造をなす論理としての弁証法があることになるのだろうか．

そこでサルトルが度々触れている量子力学の場合から始めて，弁証法が一体どのような観点で要請され，かつ確立されているのかを特に《存在と無》に現われたサルトルとヘーゲルとの関係，及び資本論の価値論におけるマルクスの観点を検討し，弁証法的理性の確立が，いかに困難であるかを見てゆきたいと思う．

(2)

ド・ブロイは,《近代物理学における連続性と個別性》《確定性の危機》《物理学的実在と観念化》のなかで,次のように述べている．即ち,量子力学において脚光を浴びた不連続説は，元々物質を不可分な粒子の集合と見做し,その粒子間の運動に連続性を認めてきたが，これ以上不可分なものの内部が問題にされれば，必然的にそこで内部自身について，再び連続か不連続かの問題が生じてくる．そこでニュートンのように，大きさのない質点を仮定すれば，今度は連続的な力の場を別に想定することになる．しかし彼の理論において確定性は検討されることなしに，唯仮定されていたにすぎなかった．つまり観察の主観とは全く独立に記述できる客観的実在が予想されていた.これが量子力学の出現に先立って,粒子につきまとっていた問題点である．ところで，不確定性については，彼は，ボアにならってある質

量に結びついた幾何学的点にせよ，単光色波の概念に結びつく厳密に定められた力定的状態にせよ，究極的にはそれらが観念化であり，厳密に実在にあてはまるわけではないことを認めている．体系は一種の有機体で，厳密には全宇宙だけである．他方物理学的単元，或いは粒子はこの体系からもぎり取られて，有機体から絶縁した単位においてのみ厳密に考察され，定義されることができる．しかしこの物理的単元は，体系の中ではその個別性を失っている．したがって粒子が体系の中に入り込んでいる時には観測することができず，粒子を把握した時には体系が破壊しているという関係にある．

他方武谷氏は，自然の弁証法及び現代物理学と認識論の中で，ボアの考え方をはっきりと批判して，量子力学における観測者と対象との切れ目は，人間の主観とは全く無関係に，客観的に決まる．問題は測定装置の中にある．不確定性とは云っても，系全体の状態は，厳密に因果的であることに根拠づけられ，部分即ち現象において統計的であるのだとし，この関係こそ弁証法的であるとされている．そして不確定性の根拠は，合成系で作られる際の合成則に求められる．そこでは，二つの系を合成する時，各部分の和以上のものが全体において現象し，確率的にのみ予測されるが，これは本質が，その全体との関連において現象する自己プロセスである．ボアの《相補性》のような考えは，立体的な対象を平面化した，いわば弁証法化したものであると．主観と客観，本質と現象等の用語規定は不明であり，またエンゲルスの奇妙な影響をうけて真意の捕え難くなっている面もあるが，観測者が全体から抽出された部分に関わり合う時，自然はその機械論的性格を失って弁証法的な面を示す．という結論であれば，ド・ブロイの場合とそれ程距っているとは考えられない．武谷氏の場合，彼の現象と本質に関する混乱した考えを除いて考えれば，自然という概念は常に観測者を含み，その意味では観測者によって認識され実践される自然が客観的自然と呼ばれるものであるが，ド・ブロイの場合には，観測者から独立した

実在を客観的という言葉で前提とし，その上で観測者に主観を対比させていると思われるからである．武谷氏が弁証法的と言われているのは正しいように思われる．というのは，存在する観測者の意識に非措定的に映じる自然は，それが一旦措定され反省され認識の対象となる時，いちぢるしくその姿を変えてしまう．例えば全体として現われていた自然対象，運動は，一旦認識の対象として，点，線，数，式，等を通じて構成されると，連続と不連続，全体と部分等の概念の影響を受けることになるから，どうしてもこの存在と認識の亀裂が埋められることが要請されてくる．確率がその綜合であるとは言い切れるとは思われない．だが，しかし，少くとも綜合をめざしていることは確かであろう．そのかぎりで，この関係を弁証法的と見做すことは可能である．唯二人ともに，他方でこの確率の世界を現象と見做しその背後に，超越的な本質を予想しているのは，矢張り古典的な考え方，即ち措定された意識だけが，観測者であって，非措定的に映じる自然は観測者不在の本来的な自然であるという考え方が暗々裡に前提とされているように思われる．

(3)

元々不連続説は，一見連続的に映じる対象の内部に，力の作用によって互いに連続する粒子の集合を考えたのだから，二元性は，外と内，仮象と実在という形で最初から潜在していたように思われる．この二元性は，今度は，新しく現われてきた粒子自身についてもあてはまるから結局無限分割の問題が不可避的になるおそれがあった．おそらくここには非措定的に捕えられる運動・時間・直線に対し，措定的な性格をもつ点・瞬間を，存在に対する認識という関係で考えるといの可能性が潜んでいるであろうが，ここではそれに触れない．唯一旦体系から抽出された部分は，この部分の内部が例え連続性をもって現われたとしても，も早，体系のなかに，そのままの姿で戻ることはできない．逆に，この部分の集合として体系を考え

れば，体系は不連続となる．分割がくり返されるだけ，全体と部分との関係は，不連続が目立ってくることになる．

ところで，物理学同様，人間の集団においても，近世のいわば不連続説は，これ以上不可分な，atom ならざる individval を最少の単位として，社会をその集合と見做すところから成っている．この場合，個体を，観測し観測されるものという意識個体として認めず，観点自身をカッコに入れて考えれば，個体は点として連続・不連続の相克からかなりまぬがれるであろう．しかしこれは，人間を事物のように対象化することを意味するから，観察者は自らを絶対なるもの，つまり対象化されないものと見做して，どこか人間世界の外に出なければならない．それに対し，個がその内部で，例えばデカルト的な反省を通じて，意識個体として独立すればこれは，外部世界をカッコに入れることが前提となっているから，そのままの姿で集団に戻ることはできず，集団は逆に不連続を構成することになるだろう．事実，近世において個人が中世的な束縛から脱して見ると，直ちにこの問題が生じてきた．確実性或いは明証性に裏づけられた意識にとって，他者相互間につきまとう蓋然性は軽視され勝ちとなる．例えばルソーの場合，まづ外的な束縛に対して，自由が内的に意識され更に倫理となるに及んで，他者とのつながりは，偶然的ないわば不幸な関係だということになる．といってもルソーの場合，事実存在している集団の連続性を否定することもできないので，この連続性を外見上のものとし，それを構成する個人を本来的なものとする．つまり集団を不連続化するために歴史を要請する．抑々歴史の初期には，自由な互いに孤立した自然人がいた．これこそ本来の人間の姿である．それが一見連続した集団を形成するようになったのは，私有財産を所有しはじめたためである．この場合，観点は，半ば始元に半ば現在におかれ，ヘーゲルのように弁証法が明確には意識されていない．しかし連続的な現象の下に，本質的な不連続性がかくされているという二元性は，すでに確立されている．現象を眺める観点と，歴史全体を眺める本

質的な観点とが，二重化されている．したがってルソーには，二種類の他者がいる．つまり自己の内部と相克する関係にある他者と，全体を眺めることのできる観点から見られた他者である．前者はコンフェッションで，後者は社会契約論で，各々表現されている．

このルソーの試みは，ヘーゲルによって大きく取り上げられることになるが，ここで，それを論じることは紙数の関係で不可能であるから，サルトルの存在と無における極めて興味深い批判を見てゆきたい．サルトルは，まづヘーゲルを《私を，私の存在において他人に依存させている》点を高く評価した後で (1) ヘーゲルが，存在と認識とを混同し．(2) そのために他者と私との間に客観的な一致が結ばれることになるが (3) これは，彼が全体のうちに観点をおく絶対者として意識個体を眺めているからである，と批判している．先立ってサルトルは，認識について，それを対自に対する対象存在の現前として，自己（について）の非措定的意識のもつ存在から厳密に区別し，つまり認識を定立的なものとして，反省意識をまってはじめて成立させ，他者と身体の問題において展開させている．ところでサルトルにおいては，《私の存在は認識に依存せず，それに先立って存在して》おり，またこの《存在は，決して認識に還元されない.》それに反してヘーゲルは，存在を認識に還元して《私は私である》という自己同一性をたて，主観＝私と対象＝私とを混同する．つまり対象認識に還元されるどころか，《徹底して対象性を排除することになる私の意識の内部に，対象性が入り込んでくる.》即ち主観＝他者が《私の核心を襲う》．《こうして意識相互間に，相互の承認による客観的な一致が実現される》．これを裏づけているのは，ヘーゲルが，非独立的契機である諸々の意識相互間の媒介者としての全体に身をおき，絶対者の観点から，これらの意識個体を眺めているからである．私は，一つの全体に向って，私を超越することができるけれど，かかる全体の中に身をおいて，私を眺めると同時に他者を眺めることはできない．

ところで，サルトル自身は，《あくまでコギトの内面性から出発して，この内面性そのものを条件づけている一つの超越した他者の存在を見だす．他者は，まなざしとともに現われて私を対象化し私を超越する．その際他者の私への現前は明証的である．そこで他者のまなざしが明らかにしてくれる対象＝私即ち私の対他存在は，それが他者の認識に依存しているかぎりで，事実的必然性をもった存在である．この存在は他者ではないかぎりでは私によって引き受けられる存在である．そのいみでは《二つの意識相互間の限界は，結局到達不可能な限界である.》

ところで，この二人のちがいは，どこに由来するのだろうか．サルトルが，エポケーに観点を据えて，内省の世界を叙述したのは，明証性の名において内省の世界に連続性を保証しようとしたからであろう．彼は，反射＝反射されるものという自己分裂的な非措定的意識から出発することによって，瞬間と持続に係わる例の不連続性を，また非反省意識と反省意識との間，及び私の意識と他者の意識との間の不連続性を，明証性を回復することによって完全に排除した．しかしながら，その代償として彼は，現実につながる位置づけを失なった．さまざまな内省及び内省の諸過程を生みだす契機が，コギトの外に取り残された．まづコギトを観点として取らせた契機，更に反省や対他存在の引き受けを促した契機が，現実の側からの認識がおそらく蓋然的であるという理由によってであろう，全く省略されてしまう．にもかかわらず，認識に先立って認識の概念が，また他者の出現に先立って対他存在から生じる概念が多少こぼれでていることは否定し難い．例えば，自己欺瞞や不純な反省，二つの対自の挫析等がそれである．勿論サルトルは，それを知った上で省略している．むしろ気付いていなかったと思われる事は，こうした多くの蓋然的なものを遠ざけた彼自身の現実の場における契機と，その結果とである．つまりコギト，或いは明証性は，それ自体が当然のサルトルの倫理と化していたのではなかったか．事実《自由への道》では，意識された明証的な私とこの私につきまとう蓋然

的な影のような背景だけがある．また見己欺瞞や不純な反省を遠ざけた結果，これらの蓋然的なもの，心的なものはすべて対他存在の漠然とした集積所に，不要なものとしてはき捨てられている．

こうみてゆくと，具体的な場を重視したヘーゲルが，逆に存在を契機として，認識の観点から叙述を行なったのも当然であろう．そして自己意識の過程が蓋然性と確実性，対象と意識，認識と存在，私と他者の混合した，更にめまぐるしく交代する過程になったのも，この契機を通じて揚棄がくり返されたためである．それ所か主と奴の対立や，二重化した意識の悲劇は，この混同があってはじめて激しく戦われるので，その意味では，この悲劇を自己欺瞞や不純粋意識という捕え方を通じて，いわば明証性によって解消したサルトルには，弁証法という言葉は，ここでは無縁に近い．この戦いは，サルトル流に述べれば，他人が私の核心を襲うがゆえに，私の存在が他人に依存するがゆえに，或いは私と他者との二つの観点の私のうちにおける同居を通じて，自己を自己以前に既に主であり奴であると見做すがゆえに可能だったのである．だから，戦後具体的な状況に戻されたサルトルが一旦ヘーゲルに戻りかけたような気配を示したのも当然である．たしかに確実性或いは明証性は，その出現の契機を蓋然的なものに負っている．しかしアプリオリに択ばれるのではないかぎり，確実性は蓋然性に，存在は認識に優先することはできないであろう．それにしても，一旦コギトによって外部世界をカッコに入れたサルトルが，果してそれを保ちながら，集団の連続的な世界を，存在と認識とを綜合する理性によって，回復することができるだろうか．

(4)

元々ルソーにおいて歴史が要請されたのは，独立した意識個体と，少くとも外見は連続的な集団とを和解させようと試みたためであった．後にヘーゲルで明らかになったように，ここには，時間が矛盾を説明してくれるとい

うことだけではなく，自己の位置をその発展の最高段階において，人間の集団全体を見渡し，自分自身は対象化されない，ただ対象化するだけの絶対的な観点が得られるという利点がある．意識個体という形のままで連続性を集団に回復させるには，この方法しかないであろう．

ところで，一見これと異なっていながら，実は大変類似した方法がある．コギトを認めるから全体が不連続になるのであれば，先立って自由を蓋然的世界の中に契機として，単に関係し合う作用力のようなものとして位置づければ，確実性とともに蓋然性という概念も消失し，個はいわば大きさのない質点として見做すことができる．作用力は，物質との関係で営まれる生命活動である．そこで連続化された類全体は，物質との間にも連続化性を回復することができる．しかし先述したように，この考え方は，人間を全く対象化することになる．個がその自由を到るところで復権を要求するであろうし，観察者は自分自身の観点の明確化を強いられるであろう．そこで連続性を破壊しないという条件で個人に最大の自由を認め，他方観点を全体視野的な歴史の発展の最終段階におく．一体何が得られるだろうか．果して自由が連続性を破壊したり観点が孤立するおそれがないであろうか．マルクスを例に，その資本論の冒頭の部分から観点の位置づけについて検討しよう．

マルクスは，まず商品社会における個々の商品のいわば他から孤立した使用価値を述べた後で価値を通じて連続性を形成する．価値は，交換を通じて交換価値となる．揚棄が図式的にヘーゲルと逆に反の方でなされるというのは，マルクスが，価値の側に連続性を認めていたからであろう．この価値形態について，彼はまず等価形態と相対的価値形態とを区別する．相対的価値形態におかれた商品は，等価形態におかれた商品Aの使用価値を自らの価値鏡としている．しかしながら価値尺度は，二者関係においては，極めて偶然的であるが，本質的には背後から社会的に等質化された労働時間によって規定されている．つまり，彼は，ヘーゲル流の表現が許さ

れるならば，まづ本質論を述べ，現象は，その後に説明されるという手続きをとっている．しかしここでは，展開を明確化するため，時間に忠実に，現象のみを述べよう．具体的な交換に際しての二商品の価値尺度は，相手の交換者のもつ商品の使用価値面のみである．つまり交換行為の動機は，双方の側における豊富と欠亡によって裏づけられるだろう．しかし一旦交換が行われる場合には，自らの商品を相手商品の使用価値と等価なるものとしておき，そこで等価形態と相対的価値形態の関係に入る．しかし二者関係においてはいづれがいづれの形態をとるかは決定されない．第三の商品の登場は，今仮りにがAの使用価値を欲すれば，それがAの中に自らの価値鏡を見ることになり，CはBと共に相対的価値形態をとることになる．そして商品Cが複数となり，実際上多数の商品生産という社会的形態の下に生みだされる時，これらすべての商品から，等価形態としてのみ扱われる商品が貨幣商品となる．

このような労働時間による裏づけを一切省いた叙述は，たしかに価値と交換価値との区別を極めて曖昧にするが，現象面における価値形態と貨幣形態に関する弁証法的な展開を，必ずしも不可能にしてはいない．そして事実歴史的には，完全に発達した商品生産が行われるまで，社会的に等質化された労働時間という概念は姿をかくしていた．実はこの概念は，資本論の外側で，古典経済学の延長上で既に資本論に先立っていた．それが価値論を裏づけることができるようになったのは，商品の社会的関係が，人間の社会的関係の現われとなす．例の上部下部構造論のおかげである．つまり現象分析の一方の過程で商品と貨幣の価値形態が現われ，他方の過程で社会的に等質化れた労働時間という概念が現われてきた．一方の商品世界に対して，他方に人間が存在する．労働力商品という実際上の出来事は，両者の対応関係を明かにしているように見える．

元に戻って，等価と相対的価値の両形態について，その背後に潜む人間の関係を二者或いは，三者関係について見よう．われ〜は主観＝私のもつ

明証性に対して，他者に映じる対象＝私の内容が，いかに偶然的また可能的であるかを，日常よく知っている．私の意識は，直接に私の意識の内部をてらしだす．しかし，例えば身体を中心として拡がる私の対他存在については，例えば他者の眼の現象形態である鏡を通じて可能的に推測するだけである．まして，私に関する他人の評判や批判が明らかにする．私の存在については，私がそれを認めるかぎりでしか私には属していない．そこに対他存在の神秘性があり，それを根拠として，いわゆる神秘的なもの不可解なものが人間関係全体に拡がっている．具体的も例で見よう．

私は，彼と主従の関係を結びたいと思う．というのは，彼は背丈が大きく美男子で，知的な面でも行動の面でも大変才れている．その上性格までが開放的で率直である等々．しかし，この私の彼に関する考えは，直接彼には理解できない．同時に彼が私について類似した崇拝の念をもっていることすらありうる．これを言語や行動に表現したところで，彼は，或いは私は依然として，この自己の外観について信じ難い．それ所か，裏に潜んでいるものを怖れるだろう．しかしながら第三者の同じような崇拝は，もしそれが複数であれば尚更のこと，彼にこの外観を信じさせるであろう．あとは彼がそれを，自分に属している事柄であると認めるだけでよいだろう．しかしそれにしても，彼は，この外観を自分自身というより，人々の頭に映ずる自分の外観としか，解さないであろう．このことは，誰も自分自身が，他人に比較して劣っているか才れているかを自分では，判断できないということを意味している．つまり一方で反省によってその存在を確証されているこの自己存在は，その対他性については，徹底して蓋然的，可能的にしか知ることはできず，したがって神秘的ですらある．彼と主従の関係を結びたいのは，この神秘的存在を彼の才れた能力に任ねてしまいたいからである．一旦彼が多くの人々に対して主となれば，彼が私の他人に対する優劣を決定してくれるであろう．私は彼に私を任ねたかぎりで，彼の判定を信じることになる．人々によって神秘的なこの対他存在を一身

に引き受けることになったこの主は，神秘そのものである．実際ある意味では，王様が裸であるかどうかを知っているのは，自己＝自己である子供だけかも知れない．

このように，われわれは，日常生活において絶えず，主を，つまり貨幣的存在を創りだしている．労働時間についての概念がなければ，商品の交換における尺度の決定は，事実的偶然的であるばかりか神秘的ですらある．これ以上分析できないものとして，それは，事実的であり，これ程の使用価値に富んだものが，これっきしりの物としか交換されることができないということに関しては，不満であり，偶然的に映るだろう．それだけに，いざこの秘密を知りたいと思えば神秘的である．この神秘は，例えば地震や氷河について，その原因が未知であるというだけの神秘とは異なっている．つまり神秘性は，使用価値から見た価値形態の意味自身であり，いわばその本質的な性格である．ここで知られる第一のことは，この弁証法においては，どちらかと言えば孤立した使用価値の側ではなく，価値の側で揚棄が行われ，その結果貨幣を通じて，各商品間に連続性が立てられているということである．例えばサルトルでは，対自存在が対他存在を引きうける，あるいは存在が認識を支えるという形で揚棄は(もしこの言葉遣いが許されるとしてだが)正の方でなされたが，ここでは逆に対自存在がその対他存在を，商品を通じて貨幣という相対的なかぎりでの絶対的存在に自己を放棄することによって反の方で揚棄が行われている．そのかぎりでは，存在は認識に還元されていることになり，従来の観念論を踏襲していると言うことができる．第二に注目されることは，マルクスが，続く物神的性格とその秘密の所で，商品の神秘性は，使用価値からでも，価値規定からでもなく，形態自身から生じてくるとしている点である．神秘は，《相互に独立せる私的労働の特殊的に社会的な性格が，人間労働としてのその等一性にあり，そして労働生産物の価値形態の性格をとる》(岩波文庫第一巻134頁》ことを知らない点に成立するとしている．更に，このことを《経験そ

のものの中から科学的な洞察が成長してきて，看破するに至るには云々》（同136頁）としてあたかも，科学的洞察が神秘のヴェールを取るかのように述べている．実際，ロビンソンや，中世の現物貢納等の生産形態の考察が，商品世界の一切の神秘，一切の魔術と妖怪を消失させてくるかのようである．前述したように物神の神秘性の源は，対他存在が創りだした価値形態に，及び等価形態を一身に引き受けた貨幣形態にある．対他存在即ちマルクスの言葉を借りれば，人間関係と，価値関係とは切り離すことができない．まして，どうして一方が他方に反映するような関係でありえよう．それ所か，どこでどのように，人間関係がその反映としての価値関係を，いわばその内部から生みだしたのかを明確にしなければ，引き続いて物神崇拝が，例えば革命後資本主義生産が終ったところでも残ることになる．同じ反映論は，下部構造と上部構造，本質と現象との対応関係としても現われ，例えば意識や存在は，それの属する上部構造を映じだす下部構造を見れば充分で，この二元性を生みだしかつ揚棄しようとする意識の独自性は，つまり認識論は無視され兼ねない．この原因をなしているのは，抽象的で未熟な概念が歴史の過程に沿って進み，最も成熟した社会において具体的に現われてくるとなす，例の歴史的弁証法にある．そして歴史の初期に現われていた現象を，現在現われている現象から導かれた本質的な概念で裏づけようとすれば，歴史という相対的な概念のうちで今度は絶対的な観点が得られることになる．しかし歴史の初期に現われた現象は，あくまでその時点における現象にすぎない．現在における現象もまた同様である．これを同時に保存させて一方が現象であり他方が本質的なものであり各々の間の距離を一気に超えて，この相互間の対応関係を洞察できなければ，物神崇拝におち入るのだと言われるなら，結局マルクスの観点に立った者だけが，物神崇拝を免れることができるということになる．誰もマルクスの歴史的な方法論を否定し去ろうとすることはできないだろう．しかし現在の現象が絶対的な相を帯びて過去に君臨するということと，要請から現

われてきた歴史に要請以上のものをつまり完全な連続性を，アプリオリに認めてしまうことは，マルクスの観点に立たないかぎり不可能であろう．事実マルクス主義はこの二つの観点に立つ人々に依って支えられ，多くの攻撃がこの観点に立つ人々から，それを認めようとはしない人々に向けられているように見える．

蓋然性に連続性を認めることによって，マルクスは，コギトに根拠をおく不連続説に大打撃を与えることができたが，逆に，この観点に立つことに同意しない人々の不連続説によって，実際上多くの抵抗に出会うことになった．勿論彼の否定した自由はブルジョア的な自由である．或いはそれとて現象面で認めるがゆえに，その構成する不連続性を，下部構造のもつ連続性によって揚棄しようとして弁証法や歴史，そしてこの観点すらが要請されたと考えられる．だからと言って，マルクスの観点と名づけたものを，一般的な観察者の観点におき代えようとしても無駄であろう．そうした観点は認識論をたしかに深めるであろうが，他方でコギトを再び持ちだすことによって，折角の連続性を破壊し兼ねないだろう．

遠廻りをしてここで漸く《弁法証的理性批判》の入口に戻ってきたことになる．問題は存在と認識を綜合する弁証法的な理性が，果して可能なのだろうか，ということである．今迄見てきたところでは，貨幣商品の存在そのものが弁証法的にのみ成立していただけである．類似した．その成立が弁証法的であるようなものは，他にも求められるであろうが，いづれの場合にも個が個としての独立性を放棄して，連続的な集団を構成する時にのみ可能となる．それに対し，二つの観点を内在させ，一方では連続性を，線運動，時間，存在の形で，他方では不連続性を点，瞬間，認識の形で措定し，それを綜合する理性を求めることは，今迄の所では，極めて困難に見える．つまり，弁証法は，この場合，方法論としてそれ程有効ではないであろう．

La dialectique et le point de vne

Michio Mizuno

Résumé

La dialectique ne compte-t-elle pas parmi les essais si importants et si nombreux d'aujourd'hui pour atteindre la synthèse valable dans differents domaines de sciences. Pour la délivrer du slowgan politique et examiner sincèrement de la possibilité d'en faire la méthode de la synthèse, il faudra s'interroger sur deux ou trois points fondamentaux, parmi lesquels il s'agit surtout le point de vue de l'observateur qui fait partie du système observé. Avec le soulignement et l'élargissement de l'idée du point de vue de l'observateur apparait le Cogito en face du monde objectif, ce qui est essayé par Sartre dans son oeuvre "Critique de la raison dialectique". Peut-il arriver à établir la raison dialectique entre l'être et la connaissance dans le cadre de la dialectique marxiste? Ma réponse est non. Mais, examiner ce sujet proposé par lui, en comparaison avec le point de vue dans l'auteur de "l'être et le néant", où il a ironiquement affirmé la nécessité de la confusion de la conscience avec la connaissance et du point de vue absolu pour permettre de synthétiser cette dualité et avec celui dans l'auteur de Capital, dans lequel Marx, situé d'une part dans le plus haut degré du dévelopment de l'histoire, voit le sens et la signification essentielles de certains catégories et d'autre part vit la phénomène concrète, mais non essentielle au cours de l'histoire humaine et enfin synthétise cette dualité dans son propre point de vue, cela servira un peu d'éclaircir la relation entre les points de vue et la dialectique.